

## 病いと人

ヴィクトリア・ヴァイツェッカー著

木村敏訳 新曜社 4800円(本体価格)

医学はあたかも純粹科学であるかに装っているが、一種の統計科学にすぎない面もあり、さらに医療となると、患者と医師の人間性に左右される面が強くなる。それを総合科学にまで高める方法はあるのか。

著者(ハイデルベルク大学臨床医学総論研究所主任教授で、神経生理学・神経学・内科の権威、1957年死去)について、訳者(京都大学名誉教授)は、「医学や医療を自己完結的に独立した科学とはみなさず、ほかの諸科学はもちろん政治や経済などの情勢とも深く連動するきわめて社会性の強い分野とみなした稀有の医人哲学者」と評している。

著者は前編を23講に分けて、さまざまな患者を登場させ、その人々との対談という形をとって学生への医学教育を行う。同時に著者は一般人にも呼びかけて、信頼を欠いている医学や医療の復活をはかっている。

医学的人間学を扱った後編でもきわめて啓発に満ちた理論を展開し、「人間の価値が重視されてくるぶんだけ自然科学的世界像は解体される」と著者はいいい、訳者は「医学の客観性は、患者と医師の双方の主観性・主体性によって補完する必要がある」と述べている。

